今月の特選句・秀逸句」　／　「今月の滑稽句」

今月の特選句

2011年4月号

風船を吹く風船の顔をして　永島董玉
風船を吹かなくても、風船のような顔の人がいますね。ちょっとのことでむくれる人も似たようなもの。「唐黍を食う唐黍の歯を剥いて」てな句も。

ショールーム春衣に脱がせ着せ上手　壽命秀次
マネキンに着せるのも、脱がせるのも結構大変なんです。自分から動きませんからね。もっとも、生きた人間を脱がせるのは別の意味で結構大変。

一年の獄中暮し雛納　酒井鹿洋
暗くて狭いところは、確かに獄中みたいなもの。箱に納める時にそう感じない人は鈍感な人。それを雛の立場で俳句に詠める人は敏感な詩人。

八百長を屋号に安き春野菜　桜井宇久夫
八百屋の長兵衛が、囲碁仲間のお相撲さんにわざと負けたことから、わざと負けることを八百長という。この屋号、復活するといいね。

引力を引きちぎって漕ぐ半仙戯　有吉堅二
ぶらんこを漕ぎあげるときは、たしかに引力を引きちぎる感じがします。「頂点の宇宙遊泳半仙戯」。「もどるとき無重力なる半仙戯」。

今月の秀逸句　（・・・七七をつけてみました）

春うらら糸電話からうわさ洩れ　田中章子
・・・わざと大きな声を出してる

朧夜や子を育てては嫁に出し　飯塚ひろし
・・・齧られ痩せた脛を撫でをり

マージャンで老の頭脳を耕せり　秋月裕子
・・・運動不足でぎっくり腰に

自転車の自立許さず春疾風　麻生やよひ
・・・将棋倒しの不法駐輪

しやぼんだまぶつかりあつて騒ぎだす　今城夏枝
・・・虚ろなれども数で勝負か

風流の始め鶯餅の糞　笠　政人
・・・天邪鬼なる松尾の芭蕉

雪とけて街おっぱいの鼓動かな　西をさむ
・・・女好きなる小林一茶

それ見よとばかり寝釈迦の山笑ふ　猿渡　仁
・・・人間どもの愚かさ眺め

雪の日や転ぶを待ってゐるカメラ　伊藤浩睦
・・・よちよち歩くだけじゃつまらん

緑側に肩たたき券春うらら　澤田蔦恵
・・・ただほど高いものはあらねど

あんちよこは携帯電話大試験　倉方　稔
・・・あの子はその後どうしたろうか

春炬燵数を競ひし夜の尿　小杉　隆
・・・お茶や麦酒を飲むからですよ

大試験終へて忘るる暗記もの　川高郷之助
・・・試験の前に忘れてはダメ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

今月の滑稽句

山葵から茎だけ離し浅漬けに	青山桂一
川工事たび重なれば鴨惑ふ	青山桂一
有言に実行重ね寒に耐ふ	青山桂一
春眠の覚めれば夢の霧散せり	秋月裕子
蕗のたう命いただき片思ひ	秋月裕子
太陽のうつかり目溢し薄氷	麻生やよひ
日に勝てず根性なしの雪だるま	麻生やよひ
主から離れ卯月の影法師	足立淑子
桜前線にさからって咲き始め	足立淑子
新入社員トラブってばかりなり	足立淑子
新参の絵馬の競ふや梅の宮	有冨洋二
紅あげて白さげなくて梅林	有冨洋二
亀だって走ってみたい春一番	有冨洋二
春炬燵猫の欠伸をもらひけり	有吉堅二
植木市「金のなる木」を値切りけり	有吉堅二
啓蟄や嬰も目をむき這い始む	安藤淑子
暁を覚えぬ眠りに夫怒る	安藤淑子
春暁の漁船の汽笛は大あくび	安藤淑子
けりつかぬ別れ話や春の雷	飯塚ひろし
ちんぽこの子も香しき春の泥	飯塚ひろし
山茶花の蕾無口に混みあへり	井口夏子
さそひてもひとり落下の落椿	井口夏子
白魚は吸ふ息あらばのみほせり	井口夏子
春を待つランドセルには夢を詰め	池田亮二
新燃岳に鬼幾匹ぞ大噴煙	池田亮二
水洟の二股愛に季語迷い	石川節子
強東風直してやろう寝ぐせ髪	石川節子
隣席に頭下げつつ百千鳥	石川節子
渡り頃三途の川の水温む	伊藤浩睦
春の宿鴉の声で夜が明けて	伊藤浩睦
春眠し一番電車遅れ来て	稲沢進一
厄年となって大吉初みくじ	稲沢進一
天高しスカイツリーはちと低し	稲沢進一
夫にチョコバレンタインや「うん」とだけ	井野ひろみ
内裏雛リヤドロ製や鼻高し	井野ひろみ
雪五センチ枝幅五ミリ落ちもせず	井野ひろみ
鴨降りて湖の真中に群がりぬ	今城夏枝
春の雲九重連山引きつれて	今城夏枝
野狐禅の三日坊主や花の寺	宇井偉郎
男どち配所の町の花見酒	宇井偉郎
万愚節食べるな燃やせ滓を取れ	宇井偉郎
厚化粧罅割れ気遣ふ初鏡	宇佐美徹郎
春の夜の夢は短くはや添ひ寝	宇佐美徹郎
蚊を払ひ夏は蛍を詠む枕	宇佐美徹郎
漕ぐでなし足をだらりと半仙戯	氏家頼一
寄居虫の宿探しゐる宵の浜	氏家頼一
三味線草早も撥持ち弾かんとす	氏家頼一
亀鳴くや七十代にぶらさがり	越前春生
三寒四温ひとりの憂さをむさぼりて	越前春生
おほかたは杖をたよりの梅見かな	越前春生
春雷や馬耳東風と六地蔵	奥脇弘久
月おぼろ天変地異は告げられず	奥脇弘久
啓蟄や微動だにせぬ腹の虫	奥脇弘久

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

今月の特選句・秀逸句」　／　「今月の滑稽句」

天井にマリリンモンロー遍路寺	笠　政人
うかうかと徒食かさねて二月尽	笠　政人
蝋梅薫る明治の私塾でみな正座	加藤澄子
大津波祖母の昔話の現実に	加藤澄子
大地震一万人を星にする気か	加藤澄子
手相見が朧の星を仰ぎゐて	加藤　賢
真直ぐに来いと花街の雪女	加藤　賢
雪野駈く犬は胴着をつけられて	加藤　賢
山笑ふまたも総理の替りけり	金澤　健
先陣を二番と競ひ春一番	金澤　健
早とちり恥ぢて赤らむ梅一輪	金澤　健
針供養豆腐こんにゃく受難の日	川島智子
神国がのっしのっしと建国日	川島智子
見つめられ魂ぬかる享保雛	川島智子
日本国議事堂の空霾ぐもり	川高郷之助
推敲の改稿に似て朧かな	川高郷之助
恋の猫肩いからせて敵地行く	北村マコ
ぼっちゃんと呼ばれる電車春を乗せ	北村マコ
霞立つ合格通知未だ来ず	北村マコ
寝違へて首まわらぬをヒヤシンス	久我正明
引き上げられし天井の宝船	久我正明
バリバリの人情厚きチョコレート	久我正明
死火山と言ふ山である山笑ふ	工藤泰子
いつまでも脱皮せぬ猫辛夷咲く	工藤泰子
どこまでが私の領土春の波	工藤泰子
佐保姫の足取り乱す冷た雨	倉方　稔
緩み切るオルゴールの螺子木の芽時	倉方　稔
啓蟄や無理して外に出なさんな	黒田忠一
雛飾る三人官女整形中	黒田忠一
音あれば水琴窟だと春の人	小杉　隆
ホワイトディー爺も一緒に如何かと	小杉　隆
水ぬるむ五感分解掃除中	小林英昭
しやぼん玉一粒種と溺愛す	小林英昭
こめかみに祖母の春愁貼つてある	小林英昭
節分に福の顔して家をでる	齋藤八兵衛
入学期付録で買った孫の本	齋藤八兵衛
笑えない夫婦漫才ボケとボケ	齋藤八兵衛
箱入りと言えども夜抜け猫の恋	酒井鹿洋
大いなるおいど並べて汐干狩	酒井鹿洋
朝稽古春場所なくてつひ本気	桜井宇久夫
うかれ猫境内横切る吾に寄り来	桜井宇久夫
春の雪都市交通を狂はせる	佐野萬里子
神鶏も小舎へインフルエンザ避けてゐる	佐野萬里子
民衆の熱気独裁氷解す	佐野萬里子
空と海と春の円盤重なつて	猿渡　仁
蛇穴を出づ絢爛の夢醒めて	猿渡　仁
啓蟄やとんで火に入るおじゃま虫	澤田蔦恵
理屈では答えの出せず春愁	澤田蔦恵
快記録東京マラソン度素人	柴田真一
目と鼻へ洗礼見舞ふ春一番	柴田真一
三寒と四温臍曲げ出足欠く	柴田真一
落第の子に気遣はれ入院す	清水呑舟
網代にも銀座がありて目刺売る	清水呑舟
青饅の秘伝明かさず母逝けり	清水呑舟

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

今月の特選句・秀逸句」　／　「今月の滑稽句」

雪女慎しやかにバスガイド	壽命秀次
目ん玉の交互に向ふ空っ風	壽命秀次
言い訳に少し嘘あり春の泥	白井道義
冴返るメタボの妻の太っ腹	白井道義
受験子の最後はやはり神頼み	白井道義
片目入れその達磨にじっと見られ	鈴木和枝
菜の花選り取り見取りの蝶ほしさ	鈴木和枝
法事の疲れ言ってはならぬと土筆	鈴木和枝
春雨や交差点にて傘おろし	鈴木哲也
淡雪や路面に残るくつの跡	鈴木哲也
朧月車の下に猫寝むる	鈴木哲也
かまい時今日は居留守と洒落込んで	高田敏男
山笑う我が家の大将山の神	高田敏男
啓蟄やもぐらの餌の逃げて行く	高田敏男
桃開くなりカプセル開けるごと	高橋マキコ
桟敷窓から俗世をのぞきひひなかな	高橋マキコ
朝刊に訃報記事あふれ冴えかえる	高橋マキコ
鬱鬱と夫にもらひし春の風邪	高橋　都
昨年の豆戸棚の隅に「鬼は外」	高橋　都
お雛様蔵入りのまま雛あられ	高橋　都
菖蒲湯に鼻まで浸かり眠りこけ	高橋素子
睨まれるものにも殻の伊勢海老に	高橋素子
風邪引きと予防のマスク向かひ合ふ	高橋素子
かげろふの中で変身ドラエもん	田中章子
卒業式初めて知りし校歌あり	田中章子
卒業の後に会得や不忘術	田中　勇
白梅や俳句は生きる力なる	田中　勇
早春の散髪をメモされたるや	田中　勇
誰が為のシルバーシート暖房車	田中早苗
場の読めぬ女子で一生根深汁	田中早苗
輩の声高くなりゆく鰤大根	田中早苗
長靴の揃ひて行けり農具市	谷むつみ
求めても植える場所なき植木市	谷むつみ
失敗の続きを見たる春の夢	谷むつみ
鶯に選ばれし我が猫の額	種谷良二
春塵の目立つ新車のボンネット	種谷良二
女房の甲斐性分かるホワイトデー	種谷良二
三毛猫の恋の相手はＡ・Ｂ・Ｃ	田村米生
ときめききらめきよろめき春愉し	田村米生
鳥帰る朝帰りとはうらやまし	田村米生
春の夢女身仏出て醒めにけり	飛田正勝
合格子親の心を憚らず	飛田正勝
一浪も二浪もなべて卒業す	飛田正勝
早寝して心置きなくする朝寝	永島董玉
四月馬鹿猫を被りて人に会ふ	永島董玉
薄氷に顔の歪みを直されて	西をさむ
走る火やあゝ勘違いお水取	西をさむ
かくまでに帽子の好きな春一番	原田　曄
ハンガーをヒマラヤ杉に鴉の巣	原田　曄
真青なる空をあまたの杉花粉	原田　曄
春眠や狸寝入りの人がいる	ひがし愛
目を借りて蛙はみんな不眠症	ひがし愛
目借時妻狩の蛙眠たがる	ひがし愛

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

今月の特選句・秀逸句」　／　「今月の滑稽句」

牡蠣といふ字は書けないが牡蠣を食う　彦阪義久
犬の目を驚かせたる大嚏　彦阪義久
その笑顔寒卵より効きそうだ　彦阪義久

啓蟄や数字飛び出すバーコード　久松久子
香水の一滴こころ読みとられ　久松久子
鶯張りみんなで渡り山笑ふ　久松久子

啓蟄や胸中這ふは何虫ぞ　日根野聖子
虫二匹春を運んで蠢けり　日根野聖子
眼に入ることの得意な春の塵　日根野聖子

啓蟄や腸に覚むサルモネラ菌　藤岡蒼樹
大人の卑白魚の目が透しゐる　藤岡蒼樹
白魚や保育器に首右左　藤岡蒼樹

「まあだだよ」寒の戻りの青い空　藤原セツ子
ちまちまを津波のみこむ春の乱　藤原セツ子
介護三てふ知らせあり春寒し　藤原セツ子

挨拶もなしに住みつくひき蛙　古野セキヱ
転ぶのは生きてる音よ寒椿　古野セキヱ
どぶろくが飲める娘のむこ探し　古野セキヱ

キャンディーズ流れてくれば春一番　前川敏夫
掃除機をしまふ先から春の塵　前川敏夫
しばらくは王侯貴族合格子　前川敏夫

茶髪との別れ悲しき卒業日　前　九疑
猿の子が村を去り行く三月尽　前　九疑
町に職なきを喜ぶ村の春　前　九疑

すき間より行ってきますとうかれ猫　松尾軍治
啓蟄や穴に手をやる引きこもり　松尾軍治

春時雨傘は要らぬと粋な方　丸山紘一
新学士居候ともなる日なり　丸山紘一
宰相に笑みひとつ無き年度末　丸山紘一

一突きの剣の鋭さ雉子の啼く　三塚不二
春暑し石拳せずとも脱いでゆく　三塚不二
ぶらんこに乗ってからです登校は　三塚不二

春一番二番じゃ駄目と吹きまくる　三橋一笑
席立てぬ目白夫妻の水浴びに　三橋一笑
まる見へや鳥の巣残し剪定さるる　三橋一笑

ハゲ頭気になる春のコンサート　村上美和
シャボン玉指鉄砲で撃たれけり　村上美和
桜咲く路へ一歩を踏み出しぬ　村上美和

鯛焼の尾鰭ぱりつと春隣　百千草
思ひ出し笑ひしてゐる四温かな　百千草
春泥や己が中なる己が敵　百千草

金網の痕を背につけ焼餅は　森岡香代子
古雛のしびれたままの足立たず　森岡香代子
バレンタイン甘い奴の一人勝ち　森岡香代子

春が来た作句に好機好齢者　森　要
大の字で孤独満毒春野原　森　要
笹舟の想い出春か船の旅　森　要

春めくや猫に鎖を付けてみる　守屋八郎
春ショール児が引つ張つて締める首　守屋八郎
芝焼いて咥へ煙草の大つぴら　守屋八郎

モノをいふ時計に起こされてゐる朝寝　八木　健
啓蟄やヒトにも虫の出づる穴　八木　健
マグニチュードは中度にあらず春の地震　八木　健

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

今月の特選句・秀逸句」　／　「今月の滑稽句」

猿よりも進化のすすみ春の風邪	柳　紅生
蜃気楼うどんの腰の伸びしまま	柳　紅生
蜃気楼乙姫様を待ってをる	柳　紅生
夫入院わがまま三昧春の雷	柳澤京子
妻いらぬ佳人ナースや梅の花	柳澤京子
リハビリはとことん疲れ眠る春	柳澤京子
冬の夜は子泣き妻泣き薬缶鳴く	山内重昭
また一人こけてせつない春の雪	山内重昭
ビリ等の孫ぐっと抱き春うらら	山内重昭
雪舐めて童心しかりしかりかな	山下正純
悪役の鞭いただけり節分会	山下正純
暗夜人マラソンの日の遠からず	山下正純
春障子猫の出入り口は其処	山本あかね
卒業の総代はこのところ女子	山本あかね
縁側に尿瓶干しあり鳥の恋	山本あかね
大試験始まる前の深呼吸	山本けい子
品格の欠ける蜜柑と勝手口	山本けい子
仏像の目線真似れば鼓草	山本けい子
千円で前髪切つて春の顔	山本　賜
咲くのに手間どつて病院の桜	山本　賜
ローカル電車菜の花にもぐりこむ	山本　賜
現実の奇想天外万愚節	横山喜三郎
サッカーの子ら浮足や陽炎へる	横山喜三郎
一段とぎりぎりルック更衣	横山喜三郎
ジーパン揺れげに如月の風つよし	渡辺さだを
馥郁と梅の香匂ふ書道展	渡辺さだを
病状は紙縒ほど癒ゆ春隣	渡辺さだを

滑稽俳句協会ホームページ掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。